No.133
2005/20 November

ISSN 0289-4882

歴博
REKIHAKU

歴史の証人写真による収蔵品紹介
『輸出された漆のうつわ』——日高 薫

歴博けんきゅう便 第23回
特別展示「縄文 VS 弥生」がもたらしたもの
——藤尾 慎一郎

研究者紹介㉑——松尾 恒一

特集 身体のイメージ

宮下 克也——未生の人—刑法のなかの胎児

梅屋 潔——魂の重さ—霊魂観と身体観

出口 顯——臓器移植患者の心と身体
—生体腎移植患者の語りから

武田 雅哉——『本草綱目』の身体論

博物館展示のいま…④—飯田市美術博物館と柳田國男館
「地育力」を育む博物館——桜井 弘人

国立歴史民俗博物館

ISBN4-86195-008-2
C0020 ¥533E
9784861950087
1920020005337
㈶歴史民俗博物館振興会 発行
定価560円(本体533円)

特集［身体のイメージ］

魂の重さ―霊魂観と身体観

梅屋 潔
Umeya Kiyoshi

霊魂と身体の観念はさまざまな社会で重要な問題であるが、いくつもの解決不能の問いを継続的に投げかけてくるところがある。その分類や関係を把握することは難しく、早くからさまざまな争点を生み、多くの用語が作り出されてきた。ここでは乏しい個人的経験をもとでに若干の議論を提出してみたい。

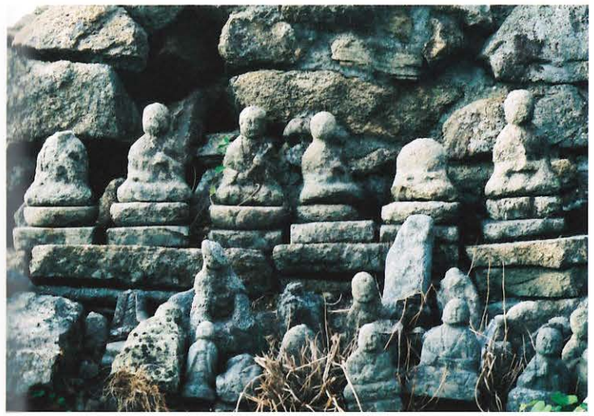
魂の重さと数、そして身体

一九九〇年から五年ほど断続的に訪れた新潟県の佐渡島の村落で、興味深い表現を聞くことができた。人間の性格を否定的に批評するときに「魂が軽い」、「ゆりこぼし」などというのである。これらは、ともに本来十なら十あるはずの「魂」が軽かったり、数が不足したり、あるいはうかつにも「ゆりこぼし」て、その人格が完全なものではない状態を指すもののようである。同義語はどんなものがありますか、と尋ねると「人の浮世に乗りやすい」のほか「魂が足らん」という表現を用いるということである。人の意見に無節操に追随し、自分の意見や方針がないことを批判してこういうようだ。ここでは魂は重さを量ったり数を数えたりするモノと同じレトリックで語られる。ある民間宗教者は魂は「出て歩き」、人に「ついて歩く」ものだという。あたかも足でもついているかのような表現だ。

また、佐渡には、エカエカなどといって、身体能力（特に歩行の）が他人より劣ったことにより人格を揶揄（やゆ）する擬音語も流通している。「あいつはエカエカだからだちかん（駄目だ）」というような用い方をする。

ある民間宗教者がひとつ話のように語る物語に、我が子が「十までの勘定ができないノールス」であった、というエピソードがある。私が当初民俗語彙（ぞくい）と考えてカタカナでフィールドノートに書きつけたこのノールスとは、地域では強烈な差別用語であり、多くの人は「意味はわかるけれども」と解説を渋った。やがて調査が進むにつれ「脳が留守」という知的障害についての表現であることがわかった。

前者の一連の表現はあたかも魂が身体をもつ存在であるかのように記述され、後者は身体的欠陥をもってその人物の人格を批評しようとする表現であるととりあえずは言ってよかろう。



① 近年佐渡は、トライアスロン大会でも有名になった。その華やかさと、コースの脇で応援する老婆が語る「魂の重さ」のギャップは一見人を驚かせるものかもしれない（新潟県佐渡市）。

② 島内にはいたるところに石仏や石塔が並ぶ。

人格の表象の相としての魂と身体

これらの言説を前にした当初の私の印象は、魂の件もエカエカやノールスの件も仕方ないではないか、というものであった。おそらくはその社会の考え方の本質に近いところに違和感を持ったためなのだろう。

たとえば、生得的に軽かったとしよう。それは当人の努力でどうにかなるものではなく、批判しても改善の見込みはない。あるいはもし「ゆりこぼし」たのが当人の過失であった場合は批判の対象になるだろうが、批判によって改善の見込みがあるだろうか。エカエカやノールスについてはもとより生得的なものである。

しかしながら、よくよく聞いてみると、これらは字義通りには、前者は当人の魂について言及し、後者は身体能力およびその一部の器官である脳について言及してはいるのだが、その実、日常生活におけるさまざまな行為の集積を含めた社会的存在についての否定的な叙述なのだ。具体的には、ノールスだろうとエカエカだろうと、肯定的に評価されている人は多い。それが批判的に用いられるときたち現れるのは、具体的には身体を持って日常生活に立ち現れる他者イメージであるともいえる。いうなれば、魂や器官と身体とが完全には分離されずに混濁（こんだく）した、広義の人格についてのイメージなのである。

化かされるということ

いわゆる霊的と思われる経験譚のあちこちにも、身体やその行為についての叙述が紛れ込んでいることに気づく。たとえば、化かされる、ということなどがそうだ。

この佐渡地域では、ムジナという動物が怪異現象を引き起こすと信じている方々が多くいた。本来は動物であるはずのムジナは、神秘的な能力を持ち、その能力を駆使して、本来はあるはずのない音や声を遭遇した人に聞かせたり、姿を変えて人間に化けて、人々の前に姿を現したりする、というのだ。次に紹介するのはその一例である。

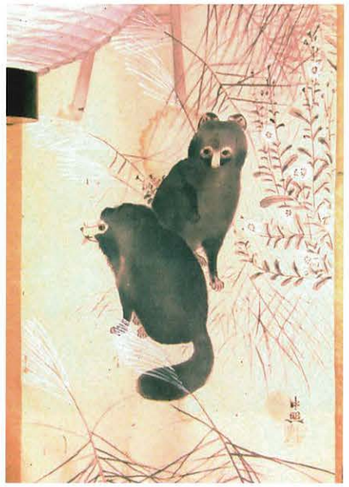
…わしがまだ子供時分、栗拾いにいったらのう、うすぐらいときのことだけれど、人間みたいにこのような格好をして（と両の掌（てのひら）を差し出す）…人間みたいに見せるの…

…何某は雪の日の集金の帰りに、ムジナに崖から蹴り飛ばされて死んだ。翌日小学校に通う途中の学童がそれを発見した…

ここで話者の心象に描かれ、語られるムジナは紛れもなく「掌を差し出し」、人を「蹴り飛ばす」重みを持った身体イメージを伴った存在である。

そして、実際の動物として身体を伴うムジナ自身も、「魂が軽い」と表現される。これは、一転して、大きな物音や明かりなどの刺激に弱く、気を失いやすいというような、われわれなら「動物学的」な、と呼びたいような実際のムジナの行動様式を指している。つまりこの場合、「魂が軽い」と

④ ムジナや生霊・死霊と交流するアリガタヤと呼ばれる宗教者。彼らもまた「魂が軽い」という。（中西裕二氏撮影）



③ 島内で数多くの寺社で祀られるムジナという動物は、いっぽうで、「魂が軽く」人を化かしたりとり憑いたりする動物と考えられている。（中西裕二氏撮影）

⑤ 女たちは楽団の挽歌に合わせて小屋の前で踊る。バナナの葉をまとっているのは死者の近親者たち。

いうのは、身体とは不可分では考えられない。それが信者たちには、さらに、人格めいたものとも結びつくのは、彼らが、ムジナたちの親族関係や姻族関係について擬人的に語るところから推測できる。

こう考えてくると、錯覚とか幻覚とかいう何かが正しくて何かが間違っている、といったような近代的媒介項が介入しない限りにおいては、身体や霊魂は、必ずしも不可分の存在ではないのかもしれない。こういったあいまいな状態を許す立場は、柳田國男が、妖怪研究の出発点とした立場にも通じるものがある。すなわち、そうした奇妙な経験談を本当であるか嘘であるかという次元で捉えずに、それは、今はわからないという立場から類似のエピソードを集めて思索を深めてゆく立場である。ちょうどこの佐渡にも「嘘のもんか本当のもんかわからんけも」というこの立場を暗示するようなイディオムがあり、しばしば神霊に関わる経験を語る際に前置きとして陳述される。

魂が軽いという能力

興味深いことに、この地域には冒頭で紹介した人格の批判に用いられる表現が、そのまま一転して卓越した能力として評価される文脈が、民間信仰のなかにある。神意を知り、サワリ（ここでは「霊障」のようなものと理解しておく）を取り除くことができるとして、広く信仰を集めるアリガタヤ、ドンドコヤと呼ばれるシャーマン的な宗教者たちがいるが、彼らは一般に信者からその能力の根拠を「魂が軽い」点にある、と考えられているようなのである。

ある神社の祭礼のお籠もり（参加者は老婆数名）に参加し、その場にいたアリガタヤのひとりが、突如、日本酒を一升瓶から一気飲みをするのを見たことがある。当然のことだが、目がすわり、体の重心がふらふらと揺れはじめた。居合わせた信者はそれを見て、「バア、それぐらいにしとけ、神さんが言わでものこと、言いはじめるすけ」とたしなめた。本人も「そうら、そうら」と言ってそれでやめた。説明によれば、「魂が軽くなるので神霊が入りやすくなる」のだそうである。この場合アリガタヤの体は神霊の容器に近いものとして表現される。コントロールができている限りにおいては、この場合、魂の軽さは一転してメリットとなる。すなわち、自分の魂の代わりに神霊を自らの身体に取り込み、その意思を一般の人々―とりわけ依頼者―に伝えることを可能にする素質なのだ。

逆に言うと、闇雲にその能力を濫用すると、その宗教者は疎まれることにもなる。どんな秘密も運命も相手の見境なくしゃべってしまう可能性があるうえに、善悪の区別もなくその身体を提供してしまうので、恐怖の対象である呪いの分野と交錯する点が多くなるのである。上に紹介したアリガタヤは中途で抑制したことでもわかるように節度ある宗教者として広く信仰を集めていたが、同じ地域にいるもう一人のアリガタヤは、「霊力は上」との評判だったが、明らかに信者たちに忌避されていた。それは、神霊の世界のことばをその善悪や社会的な秩序に配慮せずに、ことばにしてしまうからなのだった。ここにはまた人格の概念が霊との関係でほのめかされている。

霊魂の具体化と人格化

以下は、こうした複雑な佐渡の人々の世界観をできるだけ単純に、私なりに要約した結果の一部である。

ある辻に地蔵がある。その由来を尋ねると何十年も前にそこで倒れた人がいるという。そこに村人たちは事件後そこを通るたび石を積んでいた。やがてそれは地蔵となり、祠ができる。つまりは現場に何らかの力、あるいは磁場のようなものを感じ、意味を求め、解釈し、何らかの存在を慰撫しようという試みである。自分が災いを被らないためと、被害者となった人に何らかの気持ちを添えるため、さらには加害者となった何かにもう加害者にならないようお願いするためである。そこには、逆に身体を伴ってはいないが、ひとつの、あるいは複数の人格めいたものに対する配慮がある。それらのものは身体を伴っていないからこそ、石や地蔵などを「よりまし」として表象されるようになる。

それを敷衍するなら、おそらくは、日本各地の祭礼で一般的な考え方に、本来は不可視で遠方にいるはずの神霊を何らかのよりしろ、ないしは「御霊移し」にその典型を見るように、ご神体に移す、あるいは見立てることにも同様の具体化する認識論が働いているように思われる（仏像などもこの典型だろう）。

このように、佐渡言葉で言う「眼には見えでも、手にはとれでも」と表現される日常の感覚には直接訴えてくることのない霊魂は、物理的メタファーにより具体化されるのである。

しかしいくら具体化されたところで、物言わぬものはそれまでである。結局のところ、神霊の世界からの意思表示が特定されるためには、シャーマニズムのように身体や姿を伴って人格化される必要がある。

怨霊や妖怪変化を例にとろう。雷は菅原道真の怨霊の顕現とされ、それを描く絵巻はいくつもある。しかし、それには単なる「雷」のみが描かれるのではない。それが道真の怨霊であることを裏づけるために、道真その人の姿が描かれているものが多いのである。

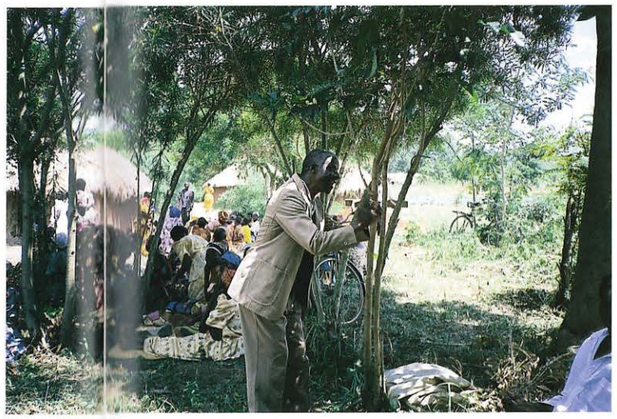
また、風俗学者江馬務の、妖怪変化についての分類表にも、あらゆる時代を通じて「人間的容姿」の分類項目があり、霊魂の身体性が必要であることを裏付けている（『日本妖怪変化史』中公文庫 一九七六）。つまりは、神霊の世界との交流には、こうした媒介イメージが必要なのだ。

単に人魂を見た、というだけでも、何らかの怪異、あるいは霊魂に対する遭遇経験ではあろうが、そこにはメッセージ性は乏しい。身体イメージによって、霊魂はまず具体化され、「ないはずの部位がある身体」、「あるはずのものがない身体」のイメージによって、妖怪変化とな

⑥ 呪術師が霊の声を聞くための道具と霊の家に見立てられたよりましの類（ウガンダ、トロロ県）。

⑦ 呪術師の治療を受ける男。

⑧ 特殊な死（この場合にはアルコールの飲みすぎ）によって死んだものの霊に対し、説教する司祭。曰く「なぜお前は日曜に教会にも来ず、食い物も食わずに酒ばかり飲んでいたのだ」。



⑨ 棺を見下ろしながら故人について語りあい、埋葬する人々。

⑩ 死霊や生霊の恐ろしさを語る老婆。

る。それに小豆を研ぐとか、誰かに背負われるなどの行為にもとづく人格化によって次第にその意図が了解されるようになるのである。

さらには亡霊や幽霊のような、「死んだはずの人間の身体」として人格を伴って登場すると、ことさら想像力のなかで具体的なメッセージを帯びるのだ。

「四谷怪談」には、悲惨な運命をたどったお岩の身体イメージが現出する。見知らぬ身体よりもより意図が明確なだけにとりわけ恐怖を喚起するのである。

おわりに

死あるいはその後の世界というのは確かに霊魂が抜き取られることと受け取られているのであろうから、霊魂自体が個別に関心の対象とされることを否定するつもりはもとよりない。ただ、ここに挙げた事例のいくつかに見られるように、うっとうしいのは、あるいは直接におつきあいの対象となるのは、あくまで具体的な身体イメージを伴う人格なのであり、そういった意味では、つねに霊魂を身体や人格と無縁なものと分けて考えることは、限りなく深い誤解に落ち込む可能性があるのである。

そのままでは手触りのない霊魂の、「よりまし」や認識の物理的メタファーを身近に求めたときに、あらゆる物体のなかでもっとも身近なものは身体である。そして身体を伴った人々と日々を共有して生まれるイメージが人格なのだから、その三者には、そしてその「重さ」にも、分かちがたい関係が横たわっているはずなのだ。このことを私は、一九九七年から訪れた東アフリカ、ウガンダ共和国でも、再確認することになったのである。その地域ごとの絡み合いの解明が、これからの私の大きな課題のひとつである。

（東北学院大学教養学部・文化人類学）

⑪⑫　菅原道真の霊は、雷が人格化し、その絵巻には実体化されて描かれている。（本館蔵）

⑭　重要な人物の遺体。

⑬　重要な人物（つまり人格として重い）人の葬儀はとりわけ念入りに行われる。（2001年、ウガンダ、トロロ県、オスクル）

特集［身体のイメージ］

臓器移植患者の心と身体

―生体腎移植患者の語りから

臓器移植において、他の人工物の移植と大きく異なるのは、ドナーの人格のイメージがさまざまなレベルで影響を与えることであろう。ここでは従来、あまり取り上げられることのなかった生体腎移植患者の移植後の自己のアイデンティティーについて取り上げる。

出口 顯
Deguchi Akira

記憶する心臓

角膜移植を受けて視力を回復した女性が、角膜提供者の生前に見たものを見るようになるホラー映画がインドで公開され、眼科医らが「提供者や患者がおびえてしまう」と上映禁止を求める訴えを裁判所に起こしたというニュースが、今年五月の新聞に紹介されていた（『山陰中央新報』五月二十四日）。眼科医は「移植を待っている人がたくさんいるのに、誤解を助長してしまう」とかんかんだったということだが、提供者が見たものを患者が幻として見るようになるというのは、既に手塚治虫が漫画『ブラックジャック』の一エピソードとして描いている（第一巻「春一番」）。

このホラー映画が『ブラックジャック』からアイディアを借用したかは定かではないが、人々の想像力のレベルでは、角膜や臓器の移植は、単に身体部分の移植にとどまらず、提供者の記憶の移植であるかのように受け止められているといえるかもしれない。

近年では、移植された心臓とともに提供者の記憶が患者の中で蘇ったり、移植手術を機に提供者の食べ物の嗜好や行動パターンを受け継いだかのように自分の性格や行動が大きく変化したという心臓移植患者自身の体験談が、テレビや書物で紹介されることがある。一九八八年に心臓と肺を同時移植したアメリカ人女性クレア・シルヴィアの『記憶する心臓』（翻訳は角川書店刊）は、その代表例ともいえるだろう。彼女は以前好きではなかったフライドチキンやビールを無性に食べたり飲みたくなったりしただけでなく、夢で仲良く会話したティムという若者がドナーだと確信し、ついに彼の遺族をつきとめるのである。医学者によってはこのような体験を「細胞記憶」と呼び、科学的に立証しようとする者もいるが、まだ初歩的な仮説の域にも達していないのが現状である。

しかし科学的な客観性はともかく、移植患者自身にとって、心臓移植が自己の著しい変容を伴うなまなましい体験であることは否定できない。

テレビなどのメディアでは、いささか極端な事例が紹介されがちだが、臓器移植した患者の中には、提供者の心が自分の中に現われるということはないにせよ、移植を機に「自分の中に他人がいる」という思いにとらわれたり、「自分とは何か」をあらためて問いかける人たちがいる。以下では、自分の家族から腎臓を提供してもらった二人の生体腎移植患者の体験を、その語りに即して紹介したい。なお以下の語りはお二人とのメールのやりとりに基づくものである。

『記憶する心臓』クレア・シルヴィア＆ウィリアム・ノヴァック 飛田野裕子訳 角川書店 1998

『ブラックジャック』1「春一番」手塚治虫 秋田書店より

排尿における他者の存在

三〇代の男性であるUさんが透析を導入したのが一九九一年で、二四歳のときだった。その後十年間透析を続けたが、二次性副甲状腺機能亢進症（副甲状腺ホルモンがたくさん分泌され続ける病気）や高血圧など透析のさまざまな合併症から